
訃 報

浮田祐吉先生を偲ぶ

千葉大学工学部 辻 内 順 平

昨年12月6日(日)、浮田祐吉先生(光学懇話会元幹事長)が急逝されました。翌7日の朝、機械技術研究所松田部長から電話をいただき、一瞬わが耳を疑ったほどでした。

浮田さん(昔からの習慣のこの呼び名を使わせていただきます)とは、昭和26年4月筆者が機械試験所へ入所したとき、部長と新入所員という関係でお目に掛かりました。それ以来最近まで、親しくご指導、ご激励をいただき、文字通り筆者が恩師と仰ぐ方でした。

機械試験所では、浮田さんが以前から手がけておられた顕微鏡対物レンズの性能測定の研究をお手伝いすることになり、それが筆者の現在の専門を決める動機となりました。

その頃学会発表は、大きな紙に書いたビラをめくりながら説明するのが普通でしたが、確か27年春の応用物理学会の発表の時、「君、しゃべることは鉛筆でビラの空いたところに書いておくといいんだよ。みんなには見えやしないから大丈夫だよ」との助言をいただき、しばらくはそのやり方を守っていました。

日本光学会の前身の光学懇話会が設立されたのが昭和27年で、故木内先生が幹事長、浮田さんが庶務幹事となりました。幹事会や常任幹事会には、筆者は「抱持ち」でお供をすることが多くなり、学生時代は近づき難い存在であった著名な先生方と一緒にの会合に陪席させていただき、胸を轟かせたことが思い出されます。当時としてはたいへん先進的であった光学懇話会のシステムは、このころ浮田さんの発案で始まったものが大部分です。

そのころ、機械試験所は西武新宿線井荻駅の近くにあり、浮田さんと帰りにご一緒することが多く、時々新宿で降りて駅前の「秋田」という飲み屋に誘っていただき、お酒の飲み方を教わりました。一杯が入ると浮田さんは実に嬉しそうに、いろいろなことを教えて下さいましたので、この道草は筆者のひそかな楽しみでした。

仕事のことや、私的なことではいつも適切な助言をいただきました。筆者のフランス留学を勧めてくださったのも浮田さんでした。ただ一度、筆者が東工大へ転出する話の時はなかなかOKがいただけず、これは駄目かと思いましたが、東工大の井上先生の「今来てくれれば名誉教授になる資格があるが、来年以後では難しい」との助け船で、「君の将来のことまで束縛する資格はないなあ」といって承諾していただいたことを思い出します。

浮田さんはまた光学工業技術研究組合の生みの親として知られています。写真機業界を中心に設立された上記の組合は、浮田さんを始めとする当時の有識者の指導よろしきを得て、学界と工業界を結ぶ協同研究の場として数々の成果を挙げて来ました。研究組合がその使命を終え、日本オプトメカトロニクス協会となった後には、会長として協会の基礎作りに尽力されたことは、記憶に新しいところです。

機械試験所のOB会が毎年11月の終り頃開催され、いつもお元気なお顔に接するのが常でしたが、昨年はたまたま筆者が外国出張のため欠席しました。松田さんの話によりますと、その席で浮田さんが「辻内君は来てないかね」と何度もいって探しておられたとのこと、その2週間後に永久にお目に掛かれなくなってしまいました。どんなご用がございましたのか分かりませんが、何か申し訳ないことをしたような気持ちで一杯です。

筆者もあと僅かで2回目の停年を迎える歳になりましたが、いつも上から見てくださっていた浮田さんをなくし、これからは一人で歩かなければと思います。

浮田さん、いろいろ有り難うございました。どうぞ安らかに眠りください。